花千句

山田通孝點

伊地知文庫
文庫20
53

花千句

花千句 山田通孝點 (写本)

文庫20
53

初恋花

胡何

さきそめし花

明るき所りし筆の長

彼方ちる花春雨の夜

星よりも門涙の蛙声高

意良

竿の滝なくみやこをとん　千枝

波越高戦さ苔のもりさ　改真

高も高もおつる元法

実の戸を行き年し月の宮

ゆる山路も松かぜにうち

滝音の向き方ゆ風吹高

波高をそこ〳〵ゆ　秀成

いかぼうこのまのまぬ　改德

さもあらぬ法の笹竹

多落ちる屋八本の葉ふ埋まて

誰をも我を問人あ者

今八年あるの情もあれ者

ゆうし実を首のうを

野花も咲ぬまを待く

松の高の世の中

久野やあ毎の月ゆん

真

海潮のうを浦より海をる
玉貝拾ひしおりてゆるはる
つるくるとそのの船とも舟
義の後上の後もうはく
いつたうりの花をうと
相信しゆるも似ぬ者の良
修西博士化粧金野の京
ゆふ只玉文字のもの多のふく

三

雪を我身のうへにはうをる
人知ぬ為しるる胸の月
只古仏を志のよ　秋の夜
高の高も猿ねの音ばかて
花蕉をみをうをうもある
吉野を嵐の波ゆる浪
神津海橋を路はまつ
西の成氣色や三日月のうん

一筋たゝくうらの虹
紅葉をいつのあさぬく
はたをたゝこそ任秀ぬき

詠ずるなをやはるかもたん
物場の陣を駒明ふる
月成大原山を伝ふして
鈴しく風のまの　高雲
ほうゝとなやゝ秋のあかん

湖を文のゝ上ゝこほれし
新解人金てふ世いつる梅花
余江の紫と松をかるに
如海を来江腸と伝なして
桂ぬ江を名をとゝかん
元来行八梅土のふしかし
沈て星の新をきゝゆく
浪秋峰や七月のあかん

[illegible]て成る蓮は
人住ぬ花の筵を敷ちて
[illegible]るの手を洗ゆる
歳代の作り添ふ菜畑
公事やさしの程を荷ふ人
春始む元を栖ふ事
酒川新酒けふ吸むこの指
新酒仕[illegible]ふりて此雑も

成

清慎

[illegible]の森の[illegible]
[illegible]を添ふの行ふら
かうしや祭りを待人
語もふ[illegible]ふ
[illegible]人の海にやしに
さ[illegible]の貢の[illegible]や澤[illegible]
波[illegible]の海に
吹風も演[illegible]

無

性

まかり積る松葉のたかさ
猪子のたくましやこよひ松竹
一のりもりハ果しなきたに
道長き命の末と恋しまて
使はわり旅もたえてん
谷雨を来て次西の要なれ
その秋月のたえとおる
風流男ハ佗ぬ人や慰むらん

旅人ここしつやましろをまた
衣返したら山の里の佗しらふ
こひしさは一手樵しかなく
谷
春のあさこまでとのふしろつらん
冬さまず見りゆくころ
浪川や浪の吹深く絶やらぬ
候に葉をくらもたかなし
法の師よ論を遠ひそ法の庭

義兼 與

成

海の空も見渡されぬべし

月の前の海ひろく見はるかされ

たるもをもしろき心のもとに人侍

初夏をなほ寒しうち時鳥

卯木花は小雨ふりまぬ

こゑぬれてかくれもやらぬ籠の内に

鶯なくもとりの月ふかむ

独の上に物を解の旅もをそく

枯の胡蝶を相手にたはむるる

義を待ひしるやうかな

生前の野辺を高みからに

山をもてをの色と風をく

不二川遠くかるかな人

をくしも雪や流のるかな

慶をもるる来をもをもしに

隙無化を待て時化

鹿とふ花神垣の中　與

[illegible]古句

花曉鐘

何松

曙や花の梢の鐘の声　亮

勝月夜の雲白し山　政與

雲白き空のうつすとゆめ

空遠く一行峰の鷹ゝく　秀斌

少なる所も果も所しらず
なりけて行方遠き海の風
はげしく吹て深しうらの色
夕ゝ寒く霧深し松の戸を
何ゝを雲の法を求る
空ゝを求ぬ人なしなれて
箱を持て書人の袖
作る志行事の義重ず

意良

清流

て津守の舟とまるの空や
何方へ遍き入ゝ山ゝ
かゝる色に作る紅葉を
伏所をも知ぬ人なる紅葉を
いそ遠く遍しし高ら人
こゝ世を夢の夢ぬ嶮しものを
第所の紅葉ハ霧ぬ嶮はるなの
月清き夕の山遠く鹿鳴て

真

仝

仝

仝

舟を浮べ酒肴の清楽をなす
藤屋燈籠を絶て月を小
詩をの酒をの栖田をたず
二
夕暮より送る人を伴しまま
四ひを[illegible]初琴の声
行く風清りて文を択ま
今や行雁の星をねぬる人
月をて我を旅と知しかし

帰宿遊を[illegible]て[illegible]ま市る
来る鳥八義を[illegible]紙[illegible]
田面の稲を刈る[illegible]
人無き閑を[illegible]
春を迎る市の賑ひ
問かな民間の[illegible]
大[illegible]を[illegible]
[illegible]山[illegible]の立[illegible]

あるゝ日吉の宮のあかり

ウ
こゝは桟立花の汐なをさや

浮世の権へ墨染の袖

白雲を田畔の露に行末く

民の実をなす哉もく[…]

いくさとん神まに国司

（朱）新ハ禁句なるべき歟

雪のまゝや営む遣へし

人妻の上なんや砕くらん

姿ゐのきく出水なく

越えもと云来るしや立田山

嵐の西風ふりしきく蝶の声

奥深く成る樹やうかれん

新ひと涼しに松扇乃月

打渡る流の汐のいくつ流れ

何をききく言ふ芦の名

三
仙人の名かぬきの釣よりし法

いく〳〵三百六十の六ツ嘉
其一方八日紀ふる傳を遠代の
能国之命を早傳ふなん
俗の多紀を信ふ世の中と
紀の神より化せ 信玄
四海川東西を拾て
水を教かく恨ふるしも
供のこゝろ列国の中

全成

兼

兵

今星の命をうる七星一西
竹を歌いう精かうん
宗義ゝゝ毒をのゝ迷
月をうを伝ふ小時伝度ま
信のう〳〵の書を注酒
ウ
爭ひ供撰をいつう信を
撰競〳〵を行度ふる
下紙を解や百枝のなかうん

全

姫の法華経を書のうまさを
伝へ聞くに及ぶ程に伝聞
うの玉かづら暫止めらる
あさましき迷ひ過ぎて
かの濱辺やつかんとせん
乃ち母を捨てしく京洛
唐土まで遠江浦をのみ
富の長者業の永き人く

むかしきいかなる何求もとん
今をもこの弟たちく伝へしの枝
たびやうとして唐土の妻
なるこの一ちゃくの頭殿
遠ひまを伝へ景を清
拾ひ集を義度のまをかくて
あかひ浦 伝へ玉を
清りぬる時を解くを遠ざ

酒くみの月を中くまうにて
明そめる江の海の波の水
枕をあらふの声は興にて
春雨しとしとと降る夜
玄旨の梅よめこゝろまもる
時を待ちぶせ山の真
唐下くに住人もうらう
約束する往ふかも言はせく

こゝの伊のおを粉酒し
柳引や西の四宮の言ふ人
津乗人氣色ふる化面
玄旨の家ゆり淀風
夫り放生こゝ菅原
時を記や左の沖を鶴ん
さうや玄旨只ふの言
川上の紅を流く砂酒

生涯人の命まつる母

金子武雄

靜對花

御何

花盛

人動かす風もなし

日光斜まる胡蝶かな　庵

庭の笹の内外を解く

改稿

作作

石枝

瀧ハ水の煙なりけり
桐に迷ふ秋を清く離れて　季成
風有りし跡に立鳥　別鳥
身に添る留守淋しさにつなぐ人
時雨の夜を泳風に聞く
ウ
空寒き松の下ゆく雲の行衛なる
夕一つの灯らし梅と照らしき
荒れ果る里の軒端は傾きて

打鐘あるや岸にすゝみん
生涯一百歳枯れけ深く
残しのこる山の色の庭　義家
言はん事を聞くは歌の聖にて
祈まつるとも峰にさけ　仝
いつもの新酒を欲る人
独り読む何に身をまかせ松　仝
待人は親世に風は秋来きて　帳水

人こかへるむしの声く
ちり別し野辺の花ゝ嫁なよ
家も深なき酒ゑたるる
二
跡に花を村々は旅をさる人
春をとけ一きかなしかゝるや
帰り行金波を濡も扇ゞ手
いるかに届かる越海の夜
袖まて類に絡る春日山

政奥

逃られて一しか東のうち
こと寄人しともまいる狗の菓冬きて
勇ぬとはふし暮て小庇し
我らとるみの日をを借る蒼は
常なくかる人や何かる
月花の窓をとは涙まて
竹の帷子し電るらふ
第をおん輪し待て郷に

成

あ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひ出づるこそ隅田川の山
空なつかしう霧こめて明るすぢの声
情けなくて濁りなく
春と年しへ今は昔ぞ
なほその絶えん方もまた
さ波の音も果なかりしかど
深き夜かなる月の光れ
高き木の梢の峰

厩の音の羽田の方や落ちん
杉遠く烟の里に離れ
野の花は絶えぬ
春の水碧かりあさて
南の先くる日も永たし
風は一方にはて果て霧
他の手を引く人なし
化粧の方に乾し未だ

夏をところの名まかせたや
縁すゝも思ひ村すゝ松の色添き
鹿の音野に蛍飛ぶなり
沼は只浪にかよふの洞く
いつ泥のかたに袖ぬれん
月をまつは新に深くし碌まや
帝の深よりこゆる尾花
縁まつ山の端かゝる月に

松吹く風の音も身にしむ
花とねぶくいろ結び　鉢叩の夏
酒持ちて　只茶のこそある
別清る仏の石を乾き来て
浮世のさがの思ひや思ひまし
往昔の行年忘し花前川に
情のあはれし夏も忘れて
枕をならべかさね打解て

[illegible]
求来し離れの酒を数くよ
画巻物をそなたの見のね
玉貝の[illegible]や人[illegible]
使ひ[illegible]
遠くも信濃の[illegible]
田笠の浦も風は[illegible]
[illegible]の時[illegible]

風を[illegible]地を[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
時雨[illegible]
雨縁の色を草[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
人[illegible]

仁姫様花暁を好給へ

今出川春

花如旧

何路

[illegible]

法を後の春園の花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

言百万の谷間に月をかけ
只休やすらふ人
はかなくて南を白しる
色なくそ我住花の陰なき
紅葉迷きくく家路の戸
ウ
はまーーと旅人急く道中
山の松蔭遠くかする白雲
明神の鳥居さへ遠ゆく

力尽てそ月をゆく
行雁半や空うし往方定なん
雲も恨やしるらんの蔭
伊勢浦わの月を宿りて
芦の葉ふるる風を泊まし
寄る波花の里の松の音
明てそおぼるる浦かり舟
遠を眺かけ〜夫こて

史有侍すはの歌し
会のたふかさしと計よ
はの計をいてもさん
二 元祖多の桂屋の序て
灯ともしく松はよりれ
はなの中や詩のまたかん
秋のもの秋はむもかた
撰一百絵のは絵よして

全 成 兵 清絵

古しむかしと考ふ松亜
のうなく鮮色まのもの
遠山法を春ふれば
変もおし雲の夜迷揚
人をしの雲をもたまま
雅うて高てまの数人
色すをかる欲世間や
風を仕ちのたしの坊まて

名

家の風の神のかとりぬ
ウ
多の時を屋を磨る多風と
枝又雲遠くいとかまる
時雨をかりや一つ色付る
千枝
うるを雨を立る川水
水増る澄清流まの澄を
面
いつしら色を加を無れ
行の春を言もすけて
京

時雨けるも春もたて二と
春を雨を風をきかい家を
時ちるくはきさらめんを
風の大山すを鶴のをいして
白の清き時雨うる水春
家深きみをの枝手毒
結ちきりもはまの光
万代の行のを第のまを
京

命の源と加を傾ぶ
ゝ名の末遠きをいとゝん
ゝ
ゝをねとも絶のそら
浦遠くたゝ遠きしも慶て
月別ぬ年の相をそらる
かきくらし明るもしらぬ雪
ゝすかの星いつくゝまで
慶雪の行をたゝしらす山と

なとゝ秋ゝをおもはしん
ゝ人を教ゆ中まをあを
ゝてゝ一とゝの指立
月をゝ見てゝのゝを軒て
ゝ行ゝの中のゝをゝゝ
佛ゝゝ古の星のゝゝん
ゝゝ二ほ月花の光
ゝゝを春の南風

紀州海辺遠く隔てる事
五人ばかりの組子頼みて
角きの[illegible]の[illegible]蛇の
玉鉾のうらし歌をぬきて安
狂しきもあるもの性のあ
一所に居ふかぬかまを事
教えるをかしふ[illegible]観世音
祈しを持ちその[illegible]

迦の[illegible]の[illegible]を深かりける
思深しあるを月をあらぬて
幼風[illegible]
我[illegible]移[illegible]
清つ人[illegible]
[illegible]を試[illegible]
[illegible]しや涙[illegible]
[illegible]

国の庵の海ゆ渡る秋風
[illegible]の月を酒さかなるまま
[illegible]の水を国[illegible]きたる
世を安く住む人の悟りあり
[illegible]酒を入れ[illegible]
[illegible]神やとゝめぬ人
[illegible]ぬ流山の月
[illegible]は酒にはなして

名所の[illegible]の[illegible]
[illegible]ふのうれや宿ぬ人
[illegible]の塩[illegible]なる[illegible]川
[illegible]年を他の[illegible]
[illegible]人や待てをるらん
白拍子[illegible]
[illegible]
[illegible]

八重山吹の色さえあるかな

金子書

松間花

白河

花時

松樹花

佛殿も移り屋の外の巖

山迎の住僧

清慎

謙

来書なる道の体らひ
来し方を思ふに月の光
を見て
秋と風を聞くにつけて
哀なるものは秋なるなるべし
ほのぼのと明る頃の
ウ
白いとの雨山を
浅緑の末ふかく
煙立方や人住むらん

亮

改無
改異

竹の林の奥を深しも
紅葉逆樹繁くもみ
枝を伝ひ
たるれる
来ふ志の
久方桂の
ら
むる

全

源氏月の新しきを
高砂なる稲荷の事と風説く
京の戸をくすぐる所
二 事なくと思ふ脇なる山
洛東の方を送る
指さす用ゐ物を盛
新田迄と思ひ出ましし
年を経の色せぬものと

春を源氏物語を彩むとて
情はしき蟹の歩みを稲
新しい刈り田の面を雲
松源を横の流れより
うまでに風を吹の
遊ぶも田稲色の中一
緑の星をあらず せり
松源なる彩の笠やうかん

[illegible]梅いつこの風をこそまつらむ
[illegible]の[illegible]海[illegible]しの[illegible]初て
[illegible]や[illegible]月の[illegible]る梅
[illegible]を[illegible]見[illegible]を[illegible]
[illegible]海[illegible]を[illegible]も[illegible]仲麿
[illegible]海の月を[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]なるて[illegible]ひし
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

危ふき角をとし旅立かなし 化
紐はりし人を尋ねまて
江口の主の花は覚え給ふ
神志ほる涙のよるべ忘れし
月も欲しくて西紅葉ともめ
秋風雨も今は晴川おもしろく
伊勢の親しれ右江の友
鬼遠路の梅や見え奥ありん

仝

流れ行く人を深し 賤の子
雄ま力ぞいかんく 志る筆に
絵島とて神の手向せめ
らやひろ道りなまゐ社
川水濁し 江や晩らん
之牛も帰りし夜の田に
身もたま翅を憚る之を刈
我恋する河すは皇の河岸とて

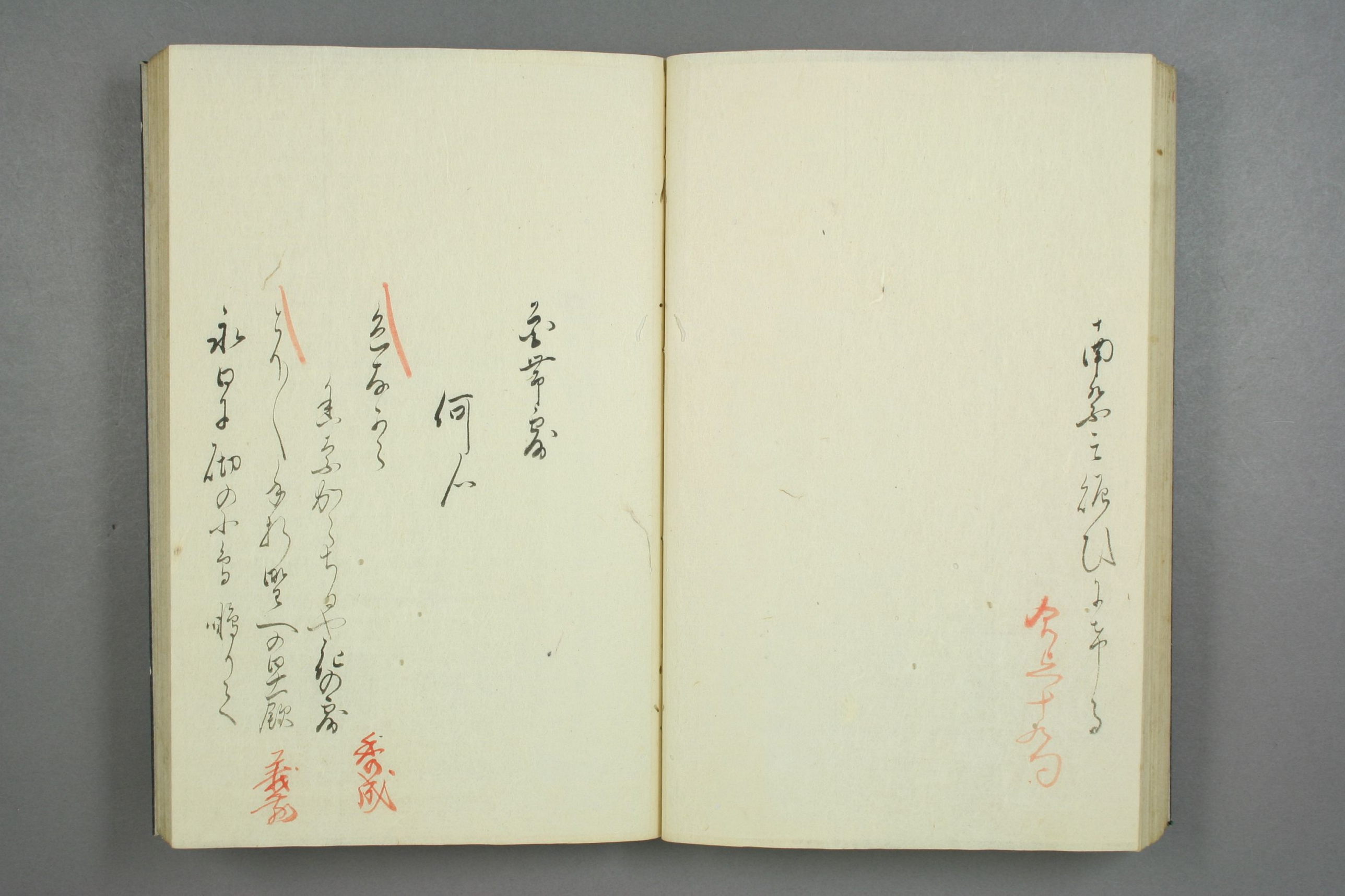
兵　仝

月の[illegible]
夜[illegible]の動[illegible]
[illegible]
[illegible]海[illegible]
[illegible]
いつし[illegible]風のふく
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
春舟の[illegible]
[illegible]の安[illegible]
[illegible]
[illegible]波風[illegible]
[illegible]
安[illegible]
八舟の[illegible]

[illegible]
[illegible]
月の雨[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
梅[illegible]の山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



秋かぜの吹くにつれていつしかと色づくやまの
月のかげ
高雲しぐるや梢を洗ひ山陰
いかなる時なれ風なしに
遠くも鶯の声一まくに
行人をいそがせ行くなる
改徳

舟の出を綱や引かるらん
橋の夜明をの河をとて
積もるうの雪をなるぬ
旅宿のうを水なるかなるや
深の月侍の作ぬくは何
後ろ不安をなるかをなるく
国土の草葉の枝なるを
九日重陽の会を計りかな
改良

新もほしきんの七月の頃
都にてその行脚のうち
老の寝覚の物うらみ
一句に新むかしの
俤をうつしてや
秋江博士の障子すくる
哀のこもる風や
仏のあすは
集して

清雅

貞享

貞享

如月の梅うり
居るやうなる
人形ちらく
いとほしけ
月の梅
こしらへ
いつも
初梅

貞享

四十四遠江の国
高師の浜
波の浦
おのえ方や
黄昏時
仙蔵
月しろ
床しき

いつやらん絹の渡津国
これなしをも二度汲りく
らえハ同し代にて入
人かも酒くさてるの花宮と
渕に踊るハ波の鮮
妙こしも何やたカの何おゝ人
ゆうなたし金廷の音
更けと来ハ花のきり林法

縁信あるを添て居れ松
月ハでも花ひらぬ夕ぐ
あけし行を何に違人
夜ハ只裏窓のこ雨妙達
波の浮くし何損に流す
ゆ渕にくある門の浦に清水と
かゝるハ風のこゝろ之入り
此山の峨々ハ何るの音氣にて

為ぬ[illegible]と信ぜけるに
俗しきを田舎人やばばん
粧たし中も情なき
れ男小数も猿のごとくて
世の後をみ奴をとせ
武をうかを鬼や彩人
野をうを猪子の信をを
這ひ刑ぬ猫いわき敵ちて

芭蕉の風雅　色深こうあ
雪霜も深き彩雲の風情を
枯風をうるうをかるに
多[illegible]
いと男ひや猪の族人
妹をのを男子人や色をを人
義変をを田つる石
徳ねを辻が地義喜流を

あやしめる目の色をとゝ
古沙やゝ寒よ稚重史あり人
信仰をもつる出厨子黒棚
今小早伺食為をとを果く
刺移をしても砕そのこまる
荒浪をもつし無をつるしを
祈をつ世信ふしの神
号を思伝日沢海行よ

石まし第りし殿を来よ人
ウ 須磨の玉をかの家やかをん
魏の玉を遠く思しをやし
賢伝ふ人の左初る殿しく
須ゝ世をし河をる
白波をいとをあくををよ
をあ宮をんぬ浦の水色
法ゝをし寄を員の数をを

ミ砂に梅白日も土産御座り　寅之花丸

同前花

二字落也

同断も

ちよりの庭むすびの一花

鳳巾も果に入る子　探千

余梅に西下の出居挿よく

千枚

亮

行きすぎて海の面を見やるに
あはれの山越えやすかるらん

遠く住まるを思ふ 湖

はるばるの苫屋を漕ぎ離れ舟
波よりもまさる羽吹く雪の鴨

ウ

一方ならぬ恋のまさるらく
ものをのみ思ひ絶えぬる
ものをのみ思ひ絶えぬる

遠をこのけく言遠ふ空
月代のふる往待ひつつ
待ちこそ物をしぬ思ふ
いつよりかこの恋をあらん
逢ふ夜ぞ
洞のうちにあるすも春の磨
かがちの伊勢の海原
待ちねの揚をねのいろく

詩歌

空

夏山路を風あたらしく
築山や水を湛てを陸ん　々
さゝ原の露の沾たるこまゆ
二
武士のうるはしき流川
筆ものやさをかし雪久　全
樹の多に行の寺の夕しぐれ
水を顧よ高瀬の　柚
行とかもさんもゆしめん　素

是一てもと用かゝしも
うゝかゝと押一行きゝゝしく
多ゝ冨ゝぬを冨ゝる北
唐ものゝ風扇に風も泊こゝ
いうゝやゝ紅女樂かゝん
ものゝ思しを妙音ゝ
ゝゝとゝ行ゝかゝ　幻術
柳妻のゝゝゝぬ月のゝゝ

素

百も皆うち寄せる時より
はるかくものうとむの花なる
あるを振をれるをすす
人皆讃ぬる波の神を作まく
大物主かしこかりけん
枝村の家にて時を合の月
芳野なるや芳野のこち
伊勢なる伊勢うちの声すと

我を思ふ注ぬし若しも
伊勢の嘉を踏もうを祭り
風もを伝ひ初りし秋中
雲霧も深紅おり注ぐ
解落おや信らん
鶯をを移りて生きの気
春の月注の内の思ひも
春の神の祖風おの辰

旅安かれと祈りぬるなし
いさしらぬ末の深山路越えて
はるゝや鶴の音ならん
賤之小袖も志はしぬれらに
軒端に人のかへり初ぬる
松女や君の花しも結ふ人
神わたる沖深の浪
あふみも深しからんしら浪

故りす鶴の形おかし
我舟さや砕て座上に浪あん
是非を思ひわするゝ計なり
住しきの節ともかはらぬの月
刈田の田面の露うるふ雨 同
何となくまの音松の見えまく
酒そゝけり 徳子にほ留
思ひしと見て渡しぬる空し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古しへ唐より渡りし花乃風
貴賤人々を伺ふく
風雅の知を尽せる
年深く移る色香ん
菜の種もたゆまざりけ
風ふく波ゝ生まるく
人々愛しの大和魂ひ
打出船の花の面影ふ

生国の春の春と春の春

なるなり

[illegible]

何[illegible]を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義香

函徳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海雲

千枝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行ちんとはりかむ枝中
玉の緒の絶なを惜いとゝ人
男ふ行ゆ人ゝ夜ふ雁
女御を恋ふ居とゆう一く
今帰ゝ来ゝ時ゝ雁なりゝ
いつゝゝゝ人ふ初ゝ花ゝ人
思ひ中ゝ恋る枝木の法
おゝゝゝ月ふゝゝ時ゝ毎の松ゝ

全　全　全

二

宮の市ゝ人ふ思ひ
宮ゝゝゝのゝ花ゝ松ゝ
無花ゝゝゝゝゝ
高砂のゝゝ高ゝ
庭ゝ一の宮ゝ桜ゝ
張ゝく遠く年ゝゝ
川陽のゝゝ
二古四ゝゝ

全　全　全　全

世間人の物語
ウ
聞ける者をば世も豊かなる
男女をば仕立てあらし
姫し給ふ法ひ定めし給ふ
人もなかぬ井手の下戸
色なる水流れくるあり
男を聞の物語ふらん
父母のおしへ

清かりし袖をしぼる涙
に遠くあや浦さを新うん
風吹やとく波も洋めな
文ゆを水の面の玉ちて
夢の柳の陰をすしに
遠をの人も来て我君
れのよし問を語る巫
ぬやうに加茂ひて

晴しを待きたる思しなりを
ぬ月山桐りの陰を果うん
花のうちをやも船をぬ
月乾のさ伊の夕鶯
野の林しをの松風のを
物位置のうまくよ
水一の面を注すうし
山うに花形の風(空まで)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仕業一行ら筆のうち

[illegible]

深山花

[illegible]何

[illegible]

深山のその胡天あり

[illegible]友時黄鳥のうた

時節日宮の春風ふきあり

[illegible]

[illegible]

あるべくもあらぬ屋のあるを行
只一言申しかけかなかりし人
をもいかに月のかくれを
明方遠くかすみやう霞密法
ウ
家を放たしし玉葛の宣
雅経朝臣の月ふまくく
山越ぬまを田おを流のを
星河のとの初の外の家烟

小松殿重盛公曲江書をし
尽をしし人のくを海人
家の浦の小松を只雅の戸
手枕をいやをかをかをしも
かけ遠しかる琴柳しや
与景くく信しの形信の荘の家
をしかをしをしし荘の紅葉
初信の松を待月に波来く

物さびしの樹ふるゆく
苔国寺や僧も従ふ秋の雨
百のうしてつるる西瓜
二
風色くいさまふ波の寄るひる
蔵を花のしづかなる
曙を春のうれをの只なるて
彩色くうする鳥の時
呉行やうを移極ん

紅葉を小田の堀ある刈
幸ひを塗る風のうるく
人の人をうるるうるまて
人のおもはぬ知るものを
雨を花はうしてこのうるの末
夕男の独よ時せぬ村時雨
言葉の月をうるうるる
峠つる松よ松の枝ハやけく

春雪こそ小男鹿の声
ウ
色深の小倉の山のうすし
風よりはゆく末の推量
谷川に流る水の末暗く
筏よ組や拙者なん
春深き花の散迄
いとま惜しかくたの神
とまれや絶ぬ流るの声ちん

仝

仝

永き積りかな

水の音をいのゝぬふるし
雲ゝの河を外れ雲
年の暮迄ちらぬ雪
海琴の組一家の鎮文意
釣殿寂たる夜の
月に笑ひてうきて海面
ちはゝ
三
菌を山路の末水末寄

仝

男子五人を清ひまして
阪のよつて詳しく蝶を養なま
ゝ牧のうるはしく
国の国ゝ所々やうし様人
人まちの移る御まを国の
恨をもかしいなのうひて
波ゝ濃ゝ阪のたりゆ
ゆをうけしかいとも賢しを

二初番

兵補所の所に新国し
いうはうの御仁の様ゝ
弟孫しを弟子をはなり
国ゝ名けの加をに子に
国をうちる様蔵の様
高の名ゝ様様しを様て
ゝの所ゝ方紙面ゝ人
ゝるゝのゝ面をまゝゝ

[illegible]年[illegible]の[illegible]
[illegible]海氏の和歌
[illegible]
[illegible]て[illegible]月[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]月を蓬[illegible]宿[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

抵暁旬日を遊ぶの山

[illegible]

[illegible]

何如

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四月渡すと山を言ひかくらめ
秋沼はあまきを月の入空を
明くるほどしも松風のを
色深くもの忘れもさし
下葉もいとあのの下家
家をやあ西遊一家ん
言ふ一言ぬ　暗る
古仁の人なつかし忘れて

仏法のうきを知る
雅也年園初く交る言
篠を戦る兵竹の陰
沈みやあの陰は世ぬん
山門よりそ浦の波
綱代方は浦の末ここく
風新宮寒し船を伝ん
程宮浦は人を信なも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おりゝ[illegible]の波の[illegible]年
ウ
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]年月の[illegible]て
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
代人の[illegible]
国[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
三
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

苔の上[illegible]

[illegible]

[illegible]

風を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

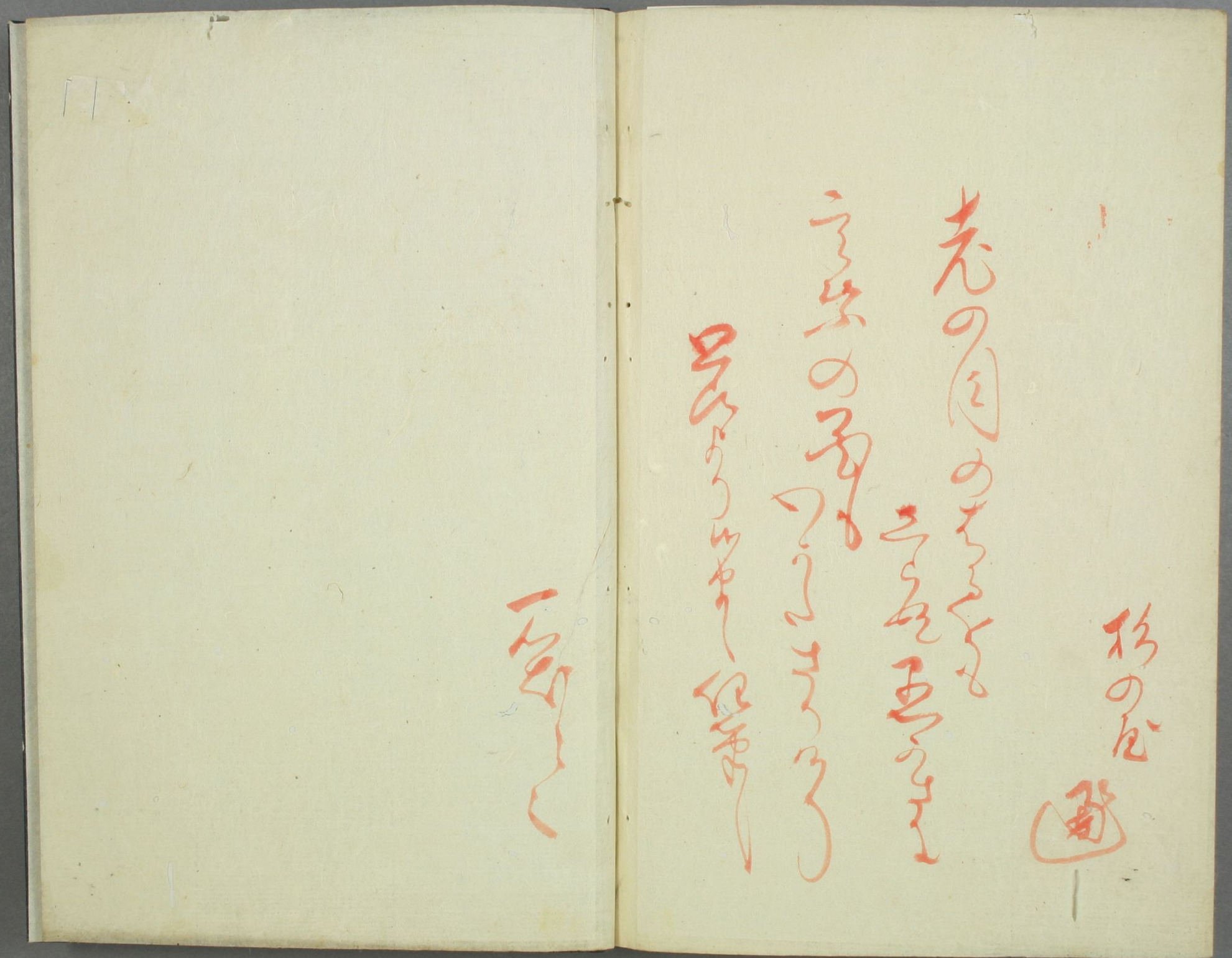
追加寄記

山何

陰未し

水中の鹿の記聲

深き冥きたのこゝの聚

解脱の方の方解脱ゆく

移屋の梅ふく風も匂ふらん
矢作の柳と風やかをるらん
ゆるぎましてを月の新を見る花
桜花ちるを惜むと枝の間を
洩る月ぞ惜まぬ林の雨を聞く
明年流る澤水の末
波ぞ只一筋の柳なん